

文芸研究 第一七二集 別刷
平成二十三年九月 発行

「小品」の時代のなかの吉江孤雁（上）

山 崎 義 光

山崎義光

一 はじめに

吉江喬松はフランス文学者として知られる。死後『吉江喬松全集』（白水社、一九四一—四三）が刊行されているが、そこに収録されているのはフランス文学者、評論家としての著作のみで、それ以前の孤雁の名による創作は収められていない。だが、明治末から大正初期にかけて、島崎藤村や田山花袋、国木田独步ら自然主義作家たちの交流圏にあって、紀行文や当時「小品」と呼ばれた散文を発表し、文集を出していた。その紀行文は当時の紀行文のなかでも独特であり、「小品」は小説や散文詩といった創作とも随筆とも断じがたい性質をもつ。

本稿では、自然主義が文学の理念と実作において文壇を席巻した明治四〇年前後から大正期にかけ、脱ジャンルの散文を名指す「小品」というカテゴリーが現れたことを背景に活躍した吉江孤雁の散文の特質について考究する。「小品」というカテゴリーは、どのような経緯でこの時期衆目を集めたのか、なぜそうしたカテゴリーが現れ受け容れられたのか。それをふまえ、「小品」という散文カテゴリーとの親和性において、吉江孤雁の散文の特質を明らかにしてみたい。

り、旧来の慣用的定型的な表現の型から離れ、固有の視座からの「現実」の発見を促す運動と運動していた。「小品」の隆盛は、言文一致体であることを必須要件とはしなかった。しかし、言文一致の確立・普及と重なる時期に、自らの感覚・思考に立脚し、それを表現することに主眼をおくがゆえに、ジャンルの拘束からも自由に、独立した作品であることも志向せず、むしろジャンルや作品であることからみ出る表現衝動、流動的な感覚・思考をすくい取る「自由」な表現を名指すカテゴリーとして用いられたとみることができるといえる。

「小品」については、木俣知史による「小品」文学の発生史と紹介がある。多元的で詳細な目配りで論じている。ここでは、明治四〇年前後に限定し、明治三〇年代後半以降「小品文」という投稿記事枠が隆盛した経緯、「小品」という呼び名が文芸性を担う積極的なカテゴリーとして用いられた明治四〇年代から大正初期にかけてを対象に、時系列的な変遷を軸により詳しく整理する。そして、この背景のなかで、小品と紀行文を発表した吉江孤雁に焦点をあてる。孤雁の散文について、主に『旅より旅へ』所載の紀行文と小品をとりあげて、その特質を論じたい。

二 「小品」というカテゴリーの前身

一定のジャンルに属するとみなしがたい雑駁な散文群を一括りにする呼び名として「小品」という呼称が用いられた事例は、明治三〇年代以前から散見される。生徒・学生によって書かれる作文の場合もあれば、論説とも随筆とも小説とも区別がつけがたいもの、もしくは、それらが混交した短い文章群の集積をひとくくりにする

明治四〇年前後、既成ジャンルの枠組みにおさまりにくい、詩的散文ともいえるべき短い散文（群）が「小品」と呼ばれ、積極的な意義をもつカテゴリーとして用いられた。それ以前から「小品」という呼称はしばしば用いられていた。いずれのジャンルとも判じがたい雑駁な散文（群）を許容する呼称として用いられたのである。「小品」は、「小説」「詩」といった創作、「随筆」「評論」「紀行文」、あるいは「叙事文」「抒情文」「美文」「写生文」などの既成ジャンルに分類しにくく、「作品」と呼ぶほどの完結性、独立性をもたない散文を名指す言葉として用いられた、とひとまず言うことができる。問題は、明治四〇年前後から大正期にかけて、一種の文芸性を担いながら、積極的な意義をもつカテゴリーとして用いられるようになったのはなぜだったかという点にある。

周知の通り、この時期は、言文一致体の普及、自然主義の勃興と時を同じくする。「小品文」「小品」というカテゴリーを盛行に導いた理由の一つは、表現者に固有の視点から自由に表現する衝動に枠組みを与えることが志向されたことによると考えられる。言文一致体による表現は、広く一般大衆への文章作法の啓蒙と不可分に広がり、場合によりけりな。いくつか例をあげてみよう。

明治三二年十一月刊の岡野英太郎編『小品文林』（緑盛堂）は、小学生的「記事文」「日用文」例を集めている。文章表現の学習という文脈のなかにあらわれる。

明治三三年九月刊、内田魯庵『文芸小品』（博文館）は、序で「過去の手習草紙を公けにする」と述べ、各種雑誌に発表した文学に関する評論、随筆、創作類を、発表年代順に集めて「小品」と題している。

のちに、「小品」の代表的作品として名指されることとなる徳富蘆花『自然と人生』は、明治三三年八月刊である。その広告文中には、「自然を主とし、人を客とし、荷稿の粹を抜き、新作の秀を萃めたる小品の記文、短篇の小説、無韻の詩とも言ふ可く、水彩の画とも言ふべきもの、無慮百篇を一巻に収む」（『国民新聞』明治三三年七月五日広告）とある。ここには「小品の記文」という括りがある。

明治三四年四月刊の井上哲次郎『異軒論文二集』（富山房）では、各章の「論文」とは別に「小品五篇」を収録している。これについては、序で「毫も相互の連絡あるものにあらず、但、其小品なるを以て一括して之れを掲ぐるに過ぎざるなり」と記している。本編の「論文」に対して相対的に長さも短く内容も「相互の連絡」のない文章を「一括して」「小品」と呼んでいる。

明治三五年七月刊、矢津昌永『地理学小品』（民友社）の「地理学小品自序」には、「地理学小品は余が平生地理学学習の際天然に触れ人事に接し随時随感乃ち筆を駆りて地理的に観察し地理的に解釈したる小品文なり」とある。「地理学」的観点に立ちつつも、しかし「随

時隨感」のものであるために「小品文」と呼ぶ。

明治三六年八月刊、千葉紫草『笑魔』（民友社）には「小品八十種」として笑話が集められている。同年十一月刊、中村春雨『角笛』（今古堂）は「小説」と分けて「小品」の標題の下に随筆的な文章が並ぶ。

明治三三年ころまでに雑誌『ホトトギス』誌上では文章課題が掲載され、その後虚子らによる写生文が試みられたことはよく知られている。子規は自身の文章を写生文とは呼ばなかった。子規の死後まとめられた明治三八年十一月刊「子規遺稿第二篇 子規小品文集」は、子規の残した散文群を一括りにする呼称として「小品」を用いている。高濱虚子による「凡例」には「此書初めは「子規写生文集」といふ名にする積りであつたが、写生文で無いものも交つて居る為に止めた」と記されている。

これらの例から見ると、テーマもスタイルも多様で、小説・論文・随筆あるいは写生文といったジャンル区分になじまない雑駁な短い散文を集めた場合に「小品」と呼ばれていることがわかる。

三 投稿記事枠としての小品文

明治三六年一月一日から数日にわけて、読売新聞紙上に「小品文」との呼称のもとに投稿入選作が掲載されている。翌明治三七年にも新年と夏八月に同様の募集「小品文」が掲載されている。夏は「帰省」の題で、そのうちの佳作を集めた文集も出版される。その序文に次のように記されている。

こゝに集めたる小品文は、三十七年の夏読売新聞に於て募集し、選抜の上、其の紙上に掲載したるものなり。当時投稿の集

るもの総計六千三百四十四通、この小冊子に収めたるものは、即ち其の中の優秀五十四篇なり。第一佳作二篇、第二佳作二篇、第三佳作十六篇あり、他は選外となす。各篇の終りに附したる評語は、出版に際して新に加へたるもの多し。

（『帰省』読売新聞日就社、明治三八・六）
 ちょうどこの頃、読売新聞の記者だった上司小劍は、紙面の余白に短文を掲載している。のちに『小劍隨筆 その日々』（読売新聞社、明治三八・九）としてまとめられるこれらの「隨筆」は、「小品」と呼ばれたわけではない。だが、新聞紙上で「小品文（読売新聞）」「百字文」（萬朝報）が流行した時期と重なる明治三六年一月二七日から明治三八年十二月十四日まで、紙面の埋め草として書かれた「隨筆」集である。序文に次のように記している。

予は無韻の詩を作るつもりで、このきれぎれの短い文章を書いたのである。明治三十五年頃から、明治三十八年の頃までの読売新聞に、毎日一つづつ書いたのを集めて、この本は出来た。三四年もつゞいて書いたのであるから、其の間には予の思想も大分変遷した。それが為に、所々に衝突と矛盾とがある。予は、世の纏つた学問も無く、確かな見識も無い人が、きれぎれの短い文章を集めて、一時をこまかすのを浅ましいことに思ふてゐたが、今は予自らの陋に陥つたのを恥かしく思ふ。しかしもともと無韻の詩のつもりであるから、読む人に少しでも趣味を興ふれば、予はそれで満足する。

「きれぎれの短い文章」、「無韻の詩のつもり」ともいう三五一篇の短文群は、ささやかな日常のエピソードから、政治や社会風俗に言及したり、文章に少しばかりの癖があつても其価値を失はぬ。ここで強調されているのは、「文章」の出来より「思ひ付き」「目の付け様」であり、「着想と着眼」の「斬新奇抜」さである。

和歌・俳句・川柳・漢詩などの伝統歌や、新体詩・小説などの投稿記事枠とならんで、形式的には「短文」であることを特徴とする投稿記事枠として「小品文」「百字文」というカテゴリーがあらわれた。百字文について伊藤銀月が「韻文の窮屈が無くて韻文に劣らぬ高い格調と床しい余情を帯びしめることが出来る」（『百字文選』）というように、和歌や俳句のような伝統的形式に則った表現に対して、それに加わる新たな散文の形式として登場したといえよう。

『ホトトギス』において文章課題、写生文が試みられ、一般においては「小品文」「百字文」などの懸賞募集形式があらわれ、明治三〇年代には新たな散文表現の実践の広がりが見られた。明治三〇年代後半から明治四〇年代にかけて、「小品文」の投稿記事は諸雑誌でも募集されるようになる。述べたように、明治三六年正月に読売新聞で募集「小品文」が掲載され、上司小劍が紙面の埋め草として短い散文を掲載する。明治三六年末には萬朝報で「百字文」が募集された。その後、諸雑誌には明治三九年までの間に、投稿記事枠として「小品文」というカテゴリーがあらわれ、明治四〇年前後に隆盛する。『中学文芸』には、明治三六年十一月の「中学文林投書規則」に、募集記事の種類の一つとして「小品文」が見える。実際の掲載は同年十二月に確認できる。『中学世界』では、明治三七年十二月に小品文募集記事があり、翌明治三八年一月から「小品文」の掲載が開始される。明治三九年には、国木田独歩の近事画報社（のち独歩

及したるまでを含み、「隨筆」とされている。小品文募集と記者であった上司のかわりはあきらかでないが、小劍の「隨筆」が売れたことから推察しても、その後の小品文の流行に役買っていたとみることはできよう。

一方、萬朝報では、明治三六年十二月二日に「短文」募集記事が掲載され、十二月二七日に「短文第一回當選」が掲載される。第九回に「毎度乍ら九十五字の制限を忘れ給ふな」とあるところから、字数制限を守らない投稿が多かったことがうかがえる。おそらくはそうした事態をうけて、明治三七年三月七日掲載分から「百字文第十一回當選」となり、「百字文」の名称が変わる。一方で、同類の投稿欄に「新派和歌」や「新体詩」もあり、「短文」では区別がつけにくい場合もあったためかと思われる。記事には「応募総数」も記載されているが、第一回が六四〇で、「百字文」と改称された第十一回が一一〇三、明治三七年六月七日の第二十四回には一七三二と、半年の間に応募数が二〜三倍に増えている。この間、四月一八日には「百字文界」という記事もある。各地で自主的に百字文の批評会のような集まりができ、選者の伊藤銀月が質問に答えている。こうした人気により、明治三七年五月には、伊藤銀月選『百字文選』（如山堂書店、同年十月には『統百字文選』（如山堂書店）が刊行されている。

一般からの募集記事枠であった「百字文」は、文体は語文が多く、文章の出来よりも、書かれる対象に主眼がおかれた。選者である伊藤銀月は、『統百字文選』の序文で次のように「百字文」にもとめる理念を述べている。「百字文は着想即ち思ひ付きと着眼即ち目の付け様が第一である、文章は第二である、着想と着眼とが斬新奇抜であ

社」で吉江孤雁が編集していた雑誌『新古文林』（選者・国木田独歩、そして『中学世界』の後継誌である『文章世界』に「小品文」投稿記事欄があらわれる。こうした動きを背景に、既成ジャンルの拘束から自由な散文領域を可視化するカテゴリーとして「小品文」という呼び名が定着したとみることができよう。

四 「小品」の隆盛

- 明治四〇年代になると、「小品」の文集が刊行されるようになる。関連する主な著作集を挙げても、次のようなものが刊行されている。
- 明治三九七 水野葉舟『あららぎ』（金曜社）
- 明治四〇九 山路愛山『愛山小品文 第一集』（警醒社書店）
- 十 白柳秀湖『離愁』（隆文館）
- 明治四一五 山路愛山『愛山小品文 第二集』（警醒社書店）
- 十二 水野葉舟『響』（新潮社）
- 明治四二一 田山花袋『花袋小品』（小品叢書、隆文館）
- 三 吉江孤雁『緑雲』（如山堂書店）
- 三 小栗風葉『風葉小品』（小品叢書、隆文館）
- 五 真山青果『夢』（新潮社）
- 五 薄田泣望『泣望小品』（小品叢書、隆文館）
- 六 水野葉舟『悪夢』（白光社）
- 七 齋藤弴花『弴花小品』（小品叢書、隆文館）
- 九 泉鏡花『鏡花小品』（小品叢書、隆文館）
- 十一 高濱虚子『虚子小品』（小品叢書、隆文館）
- 十二 松原至文編『小品文範』（新潮社）

といえよう。

水野葉舟の最初の作品集『あららぎ』は、詩と散文を含み、散文の方は「文集」とされていた。散文詩を意識した散文を「小品」として自覚するのは『響』からである。水野は『響』の序で「小品を集めて、一冊にする事とした」と記している。この書は、真山青果『夢』とともに、新潮社から「小品文集」と銘打たれて宣伝された。その翌月には隆文館から小品叢書が刊行されている。明治四二年十二月には、「作文叢書」の一冊として、「小品」の文例、解説を載せた『小品文範』が刊行される。これには「小品文に対する感想、小品文創作の態度」の標題の下に八名の作家による小品（文）についてのエッセイが収録されている。「文鳥」「夢十夜」「永日小品」「満韓とところどころ」を収めた夏目漱石『漱石近什 四篇』（春陽堂）が刊行されたのも、明治四三年五月のことである。その後、大正期にかけて、「小品」という呼称が、小説、散文詩、隨筆、写生文、叙事文、抒情文といったジャンルにおさまらない、自由な散文を指す積極的な意味をになって広く用いられるようになる。大正二（一九一三）年には、忠誠堂から「現代小品叢書」が刊行されている。田山花袋『椿』（大正二・五）、正宗白鳥『青蛙』（大正二・六）、前田鬼『途上』（大正二・七）、吉江孤雁『砂丘』（大正二・七）、窪田空穂『旅人』（大正二・九）、島村抱月『雫』（大正二・十一）である。

確認してきたように、「小品」という呼び名はすでに存在していた。したがって、明治四〇年前後にはじめて現れたわけではない。だが、それを積極的に、いわば脱ジャンルのな散文ジャンルとしてとらえた作品集が現れた時期は明治四〇年代である。そこには一般読者へ

- 明治四三・一 白柳秀湖『秀湖小品』（小品叢書、隆文館）
- 二 沢川玄耳『玄耳小品』（小品叢書、隆文館）
- 四 水野葉舟『葉舟小品』（小品叢書、隆文館）
- 五 夏目漱石『漱石近什 四篇』（春陽堂）
- 六 相馬御風『御風小品』（小品叢書、隆文館）

この時期にも、時事評論的なテーマの文章を集め「小品文」と名付けたものに、山路愛山『愛山小品文』第一集、第二集がある。ただし、これらに所載の文章は明治三二―三三年のものである。第一集の序に次のように記している。

若し格法を以て論ぜんには、此文の如きは蓋し無数の誤謬あるものならん。若し用意を以て論ぜんには、此文の如きは蓋し甚だ精練を欠くものならん。されど著者の語を以て著者の胸臆を序し、言ふべくして言ひ、黙すべくして黙し、情の動くが如く動き、意の止まる所に止まり、一片の心、自から偽らざるに至つては、苟に信ず、人後に落ちず。

「格法」「用意」よりも、「著者の語を以て著者の胸臆を序」することに主眼をおくとするところに「小品文」と名付けた由来がある。

そういう旧来の語用例に対して、より積極的に固有の意義をになつたカテゴリーとして「小品」という呼び名が用いられるようになる。その時期を指標となる出版物との対応でいえば、明治四一年十二月に水野葉舟『響』翌年五月に真山青果『夢』が新潮社から「小品文集」として出版され、隆文館から「小品叢書」が刊行された明治四二―四三（一九〇九―一九一〇）年頃―明治四二年一月の『花袋小品』にはじまり明治四三年六月の『御風小品』にかけて―のことである

の文範提供、宣伝をねらつた側面もあったであろう。しかし、投稿記事欄が、その長さ（短さ）を要件としていたのに対して、文士たちが「小品」として書いた文章は、必ずしも投稿枠としての「小品文」ほど短くない。長さの問題であるよりも、ジャンルのな枠組みを度外視し、多様で自由な表現衝動をすくい取る枠組みとして見出されたのだと言えよう。

『小品文範』所載のエッセイは、蒲原有明「自由なる形式と主観の流露」、徳田秋江「自然描写と官能」、永井荷風「自由は小品文の生命」、吉江孤雁「小品文を書く態度」、窪田空穂「抒情と写生」、相馬御風「感想の自由なる表白」、真山青果「小品文の立場」、水野葉舟「経験の上に立ちて一言す」の八編である。諸家それぞれに違いはあるが、「自由」な「主観」の表現であることを基底に、「感情」なり「主観」が（「自然」描写）と混融して表現されることとする見方が一定の共通性として指摘できる。感じ考える主体の感情と描写とが混融した詩的散文という理念型を中核とし、内容にも形式にもジャンルの拘束にも拘泥しない自由な表現の領域を指す言葉として「小品」を意義づけているといえる。そして、「小品」にとって参考となる著作としては多く言及されているのが、「枕草子」「徒然草」といった古典をはじめ、ツルゲーネフ『散文詩』『旅人日記』、徳富蘆花『自然と人生』、水野葉舟『響』などである。

水野は「経験の上に立ちて一言す」で、まず新聞・雑誌における一般募集の投稿記事枠である「小品文」と、文士による「小品」とを「混同したくない」という。他方で、「小説」「詩」「叙事文」「抒情文」といった「区別」は「不自然な事」であり、「区別を立てる事の甚だ

困難」だという。そうした「区別」からの逸脱を許容し、作家の「腦」から出た感想の流露したものを「小品」と呼ぶ。それゆえに、「從來使ひ古した言葉を用ひない事を勧めたい」といい、「クラシック」に拘束されないことを勧めている。「吾々は常に始めて目を開いて世界を見たもの、やうな心持で、別に人に見せるためでなく、わが心に語るつもりで真に見真に感じた事を、従来に使ひ古した言葉によらず、ありのままに潔白する事を第一に心懸けねばなるまいと思ふ」と結んでいる。

以上のように、明治四二年前後、積極的な意義をになって「小品」というカテゴリーが用いられるようになる。こうした「小品」の書き手と目された一人が、水野葉舟とも近い吉江孤雁である。

五 吉江孤雁の明治四〇年前後から大正五年

吉江孤雁（一八八〇—一九四〇）は、長野県松本市の母の生家で生れ、同県東筑摩郡塩尻村で育つ。父母とは離ればなれて、祖母・伯母に育てられる。松本中学に入學する。先輩に中澤臨川、窪田空穂がいる。彼らとはのちに同人雑誌『山比古』を刊行することになる。中学卒業後、しばらくは山林の伐採、養蚕の手伝いなどをする。その後上京、明治三四年、早稲田大学高等予科に一期生として入學する。東京では住居を転々とするが、窪田空穂、水野葉舟らと交遊し同じ下宿で同居していたこともある。水野の誘いにより、植村正久の教会にも出入りしている。早稲田大学英文科に学ぶ。明治三五年、雑誌『山比古』に同人として加わる。明治三八年卒業。研究生として「英文学に現はれたる自然美の研究」で島村抱月の指導を受けた。と

ともに、矢野龍溪総裁、国木田独歩主宰の近事画報社に入社、雑誌『新古文林』の編集にあたる。独歩と近しくなったのは、不遇だった独歩の作品「運命論者」を雑誌『山比古』（明治三六・三）へ掲載したことがきっかけであったという。明治三九年、早稲田中学に英語教師として就職。このときの教え子に西條八十がいる。明治四〇年、結婚。明治四一年、早稲田大学高等予科講師となる。

明治四一年十一月、翻訳集『ツルゲーネフ短篇集』（内外出版協会）を刊行。翻訳には、他に、『短篇三種ツルゲーネフ集』（博文館、明治四三・四）、モウパッサン『水の上』（中興館書店、大正二・九）、ゴルキイ『三人』（早稲田大学出版部、大正三・二）、ビエエル・ロディ『氷島の漁夫、埃及行』（博文館、大正五・一）などがある。

創作では、雑誌『山比古』に同人として加わることから、東京郊外の森林、旅先の山や湖といった風景の描写を基調とした散文を発表。自然のなかの一生命としての人間という自然観・人間観に立った小品の作品集、紀行文集を刊行する。『緑雲』（如山堂書店、明治四二・三）、『高原』（如山堂書店、明治四二・三）、『旅より旅へ』（中興館書店、明治四四・七）、『青空』（中興館書店、大正元・一七）、『砂丘』（忠誠堂、現代小品叢書、大正二・七）、『霧の旅』（中興館書店、大正三・六）がある。大正五年に渡欧する前には、二冊の集成を出している。すなわち、『高原』『旅より旅へ』『霧の旅』から紀行文をまとめた『旅路』（中興館書店、大正四・六）と、『緑雲』『旅より旅へ』『青空』『砂丘』から旅行記をのぞいた小品、散文詩等をまとめた『緑の国』（植竹書院、大正四・六）である。

他方、評論的な著作として、『純一生活』（早稲田文学社、大正四・

四）、メーテルリンク論の『神秘主義者の思想と生活』（天竺堂、大正四・一）、小品と評論を集めた『愛と芸術』（窪川書店、大正五・一）がある。

大正五・九（一九一六—一九二〇）年には、第一次世界大戦中のフランスにわたる。フランス滞在中、小牧近江と接している。帰朝後は、早稲田大学文学部仏蘭西文学科教授となる。大正十一年、フランス文学・文化の紹介者としての功勞により、シュヴァリエ・ドゥ・ラ・レジオン・ドヌール勲章を授与される。小牧、山内義雄らとともに企画したシャルル・ルイ・フィリップの十三周年忌記念講演会にて「大地の声」の題で講演を行う。これが反響を呼んで、農民文芸興隆の機縁となった。大田卯、中村星湖らと農民文芸会を発足。その後、この会は大正十五年十月、『農民文芸十六講』（春陽堂）を発売。昭和二年十月、雑誌『農民』（新潮社）を發行する。吉江は創刊号に「老齡村落」、翌年一月号に「三重の包圍」を寄稿している。

信州の山岳風景に親しんで育ちながら、東京に出て郊外の住居を転々としてつづつ都会生活をしていたことが、自然との融合を説く自然観を導く背景となっている。とともに、早稲田人脈、独歩の交友圈にあったことが、自然と生命を自らの文学的営為の主要テーマとすることへ導いた。英米仏露と広く世界文学を渉猟し、このテーマを追求している。

当時の多くの作家たちがそうであったように、二葉亭四迷によるツルゲーネフ『孤人日記』からの翻訳「あひびき」、それに影響を受けた国木田独歩『武蔵野』をはじめとする独歩の諸作に感化を受けている。雑誌『山比古』創刊の頃には、『孤人日記』（『スポーツマン』

スケッチス）が、島崎藤村、田山花袋をはじめとする交流圏のなかで盛んに説まれたことを窪田空穂が回想している。孤雁は、ツルゲーネフの自然描写に強い関心を示す点で徹底している。『ツルゲーネフ短篇集』の序文では、ツルゲーネフの「自然を多く描いてあるやうな短篇」を集めたと記す。また、『短篇三種ツルゲーネフ』のはじめに、その作風について、次のように紹介している。「ツルゲーネフの観たる人生は戦ひである。永遠に亘る不断の方則に対して微弱たる人間があがき悶いて止むを得ずする戦ひである。その果ては個体の破砕となり、つひには絶滅に帰して行く悲惨な戦ひである。然も脱がれんとして脱がれ得ざるのが事実である」。そう概観したうえで、「自然」を描いた作品について、「ツルゲーネフには、前に言つた永遠の方則といふやうなものが、一部形を取つて表はれて来たものとして眼前に浮ぶ自然の姿を、みじめな人間の生活と対比して、靈あるものとして自然を描いた数種の短篇がある」と記している。

孤雁自身の書いた小品と紀行文の特質も、その自然描写にある。明治四〇年前後は、自然主義が文壇を席巻した時代であり、孤雁はその近傍にいた。だが、孤雁の散文に特徴的なのは、ほとんど人事が描かれないことである。最初の作品集『緑雲』にこそ、人事のエピソードを、いわば自然のなかで生きる「風景」として描き、独歩の短編を思わせる作（「杜」「車の男」など）もある。が、その後の紀行文や小品と呼ぶべき作には、あまり表れなくなる。森・林、山海といった自然を生命としてとらえ、人間もまた自然の一部としての生命ととらえるところに、孤雁散文の特質がある。

六 孤雁の紀行文・小品の同時代評価

明治四四年十月号の『文章世界』(六卷一四号)には、「小品の研究」
「現代の紀行文」の記事が併載されている。孤雁は、その両方でもとり
あげられている。

「小品の研究」には、水野葉舟、吉江孤雁、小川未明、夏目漱石、
永井荷風、秋田雨雀、島崎藤村、田山花袋、島村抱月、高濱虚子、
森鷗外らの「小品」がとりあげられ、その特色がコメントされている。
孤雁は水野葉舟に続いてとりあげられ、次のように評されている。「葉
舟氏の官能はいつも自家の官能であるが、孤雁氏の作品に見える官
能は、自家の官能其のものといはんよりは、寧ろ自家の官能をさな
がらに自然界の現象に移し與へて、古い言葉で分り易く云へば、自
然界の現象をバアソニファイして、それに自家の官能を其のまゝ、現
象其のもの、官能として了ふと云ふやうな風に見える。」

「現代の紀行文」では、紀行文をその傾向から次の四つに分類し
ている。「旅行を其のまゝ、書いたもの」として、幸田露伴『枕頭山
水』(博文館、明治二六・九)、小島烏水『扇頭小景』(新聲社、明治
三二・五)、大町桂月『二簗二笠』(博文館、明治三四・二)、遅塚麗
水『ふところ硯』(左久良書房、明治三九・六)をあげる。「案内記
の臭気を帯びたもの」として、大橋乙羽『千山萬水』(博文館、明治
三二・二)、坪谷水哉『山水行脚』(博文館、明治四四・七)をあげる。
そして、「地理的探検に旅行の趣味を加へたやうなもの」として、小
島烏水『日本アルプス』(前川文栄閣、明治四三・七)をあげている。
それらに対して、吉江孤雁については、「自己の抒情を以て主とした

もの」と評する。とりあげているのは『高原』『旅より旅へ』である。
後者について、「『旅より旅へ』の著者のやうに、抒情を専らにした
ものは、主観的価値より客観的価値に向つて進まんとしつゝ、あるや
うなもので、これは事実そのものよりも感興と文章とを主としてあ
る」と評する。この評は、同時代の紀行文のなかにおける孤雁の紀
行文の特徴を浮き彫りにしている。紀行文であるから、旅行にかか
わる行程や場所の説明、同行者や出会った人についてももちろん記
される。しかし、孤雁の場合、訪れた場所の紹介、案内記的な説明
はあまりない。ある場所を審美的に評価し称揚したりすることに主
眼がおかれない。過去にその場所へ誰がおとずれ、どのように記
されたかということにもあまり関心が無い。地理(学)的な興味も
ほとんど記されない。そうした人事、文化、歴史についての興味は
希薄である。旅の私的な記述には違いないが、同行者や旅先での出
会いについても重きはおかれない。孤雁の紀行文の特徴は、旅に出
たその場所で自らが感応した山川草木の風景描写に主眼がおかれる
点にある。

明治四〇年十一月刊『文章世界』に、合評座談会記事「今の紀行
文家(合評)」(片上天弦、水野葉舟、吉江孤雁、前田木城)が掲載
されている。その中で孤雁は、遅塚麗水の紀行文を評して、麗水の
文章には「漢文脈の弊」が現れているとし、「何何然などいふ抽象
語」は「何処の山へでも當て嵌まるから、^{地方色}地方色を出すには非常に
損」と指摘している。また、久保天随の紀行文については、「どれを
読んで見ても、此の人は行つた処に就いての智識を俵らさうに捏
廻す。一寸見た物でも直ぐに古典を担ぎ出す。漢文の例など引いて

古人なら憊う思つたらうといふ様な事を言ふ。衡学的だ。」と批判し
ている。それらに対して、小島烏水『雲表』については、他の参加
者が低評価ななかで、孤雁は「多少自然対人間の関係に眼を着けて
ある所」を長所としてあげている。これらの発言を孤雁が書いた紀
行文と合わせ読むとき、孤雁が自身の紀行文を書く際、何を排除し、
何を主眼としようとしたかがうかがえる。

注

- (1) 木俣知史「小品文学の世界」(木俣知史編著『明治大正小品選』
おうふう、二〇〇六・四)
- (2) 松原至文編『小品文苑』に「小品文に対する感想、小品文創作の態度」
の標題の下、小品に関する諸家八名の文章が掲載されているなか
で、小品と関連づけられる作品に言及のない窪田空穂以外のすべ
ての論者が、『自然と人生』に言及している。

- (3) 徳富蘆花『自然と人生』(岩波文庫、一九三三・五)
- (4) 引用文中に「明治三十五年頃から」とあるが、荒井真理亜「上司
小剣作家以前の小品『その日〜』」(『上司小剣文学研究』和泉
書院、二〇〇五・十)が指摘するように、明治三十六年からの誤
りである。荒井は、上司が読売新聞記者として編集にかかわり、紙
面に余白が出来た時、その余白を埋めるために執筆された「こと
を指摘している。荒井は、大町桂月の時評を論拠として、『その
日〜』所載の短文群を「小品」として扱っている。しかしなが
ら、新聞紙面掲載の経緯および書名に「隨筆」と入れていること

からも、自覚的に「小品」と位置づけているわけではない。本稿
で論じるように、「小品」という呼び名は、ジャンルに位置づけ
にくい短文群を指すカテゴリとして用いられていたものの、文
芸性をなつた積極的なカテゴリとしては未だ用いられていな
い。投稿記事枠として「小品文」というカテゴリがあらわれる
のも、『その日〜』と重なる時期である。そうした背景からみて、
荒井が『その日〜』、薄田泣菫『茶話』、芥川龍之介『俳翁の言葉』
を「小品」の代表作とし、「三大小品」としているのは恣意的な
評価に思われる。

- (5) のちの文集『金魚のうろこ』(東雲堂書店、大正五・三)の序文に、『そ
の日〜』が「私の木には珍らしく、七版までを重ねた」と記し
ている。

- (6) 以下、吉江孤雁の略歴については、根津憲三・櫻井成夫・日夏
歌之介纂修「吉江喬松年譜」(『吉江喬松全集 第六巻』白水社、
一九四一・一二)、および「吉江喬松」(『農民文学』(『日本近代文
学大事典』講談社)を参考とした。

- (7) 黒岩比佐子『編集者國木田独歩の時代』(角川選書、
二〇〇七・十二)は、独歩と『山比古』同人たちとの関係について
次のように述べている。独歩の小説「運命論者」が、東京や大阪
の雑誌から掲載を断られたのを、積極的に掲載したのが雑誌『山
比古』だった。「運命論者」は『山比古』という早稲田人脈を中心
とする同人誌に温かく迎えられ、それをきっかけに、同誌のメ
ンバーである窪田空穂、吉江孤雁、平塚篤、中沢臨川およびその
友人グループとの強い絆が生まれた(四八頁)という。

- (8) 吉江孤雁「二葉亭氏と独歩氏」(『文章世界』明治四二・六)では、

独歩がいかにも二葉亭の「あひびき」から感化を受けているかを指摘している。孤雁もまたその感化の系譜につらなる。

(9) 窪田空穂『わが文学体験』(窪田空穂全集 第六卷)角川書店一九六五・六、引用は特波文庫、一九九九・三)の「七 同人雑誌『山比古』に次のような回想がある。「創刊は、明治三十五年、体裁は『文学界』に倣っての四六倍版であった。／＼巻頭は、島崎藤村のツルゲネフの『スポーツマン・スケッチス』(狐人日記)の読後感で、やや長文の感想録であった。この書の持主は当時二十代だった柳田国男氏で、田山花袋がそれを借覧して感嘆し、当時小諸に教員をしていた島崎藤村に一説を勧めて郵送したその読後感で、田山花袋に当てたものである。原稿になると思っ借りてきたのは平塚(引用者注・平塚篤)であった。」(／＼は改行箇所)。中澤臨川、吉江などもこのころ熱心に読んでいたことを回想している。ただし、『山比古』創刊号の藤村の記事については記憶違いがあるようで、当該記事は『草わかば』の作者に「を指すと思われるが、これは浦原有明に宛てたものである。また、そのなかで『狐人日記』に触れた部分はくわすかである。次のように記されている。「ちかごろはいかなる説ものを友とし居られ候や、ツルゲネフの狐人日記は上下ともすでに御読みの由、小生は兄のあとをうけて上巻のみよみ了り、旧臘田山兄よりフロオベルなどの作と、もに下巻をも送りくれ未だとりかからず候へども大楽みと致居候。柳田兄の御話に狐人日記は三十六七歳の筆とか驚くべき人と存候、兄の御評もうけたまはり度ものに存候。」

(やまざき よしみつ・大阪府立大学工業高等専門学校准教授)